常葉大学教育学部紀要〈論文〉
第38号　　2017.12.　　55頁～　68頁

杜甫の「詩家自覚」異説
―― 詩を残すということ ――

A different way of thinking about what Du Fu（杜甫）considers himself to be a poet
― To convey poetry to future generations ―

冨山敦史
Atsushi TOMIYAMA

（平成二十九年九月七日受理）

抄　録

本稿は、今日「詩聖」という名を冠している杜甫（七一二～七七〇）の詩が如何に残されたのかを当時の社会状況と杜甫の生活や行動を踏まえつつ、「詩家自覚」という視点から、その可能性を考えたものである。詩家自覚を杜甫自身の「詩を残す、詩を伝える」ことと捉え、「宮廷の書庫に保管すること」、「寺院等へ保管すること」、「友人に託すこと」、「援助者に託すこと」、「詩人仲間に託すこと」、「家族に託すこと」の六つの可能性を挙げた。その中で「家族に託すこと」の可能性が、「①子どもに託すこと」、「②家族に託すこと」、「③家族を増やすこと」の三つの観点から考えられ、それぞれの可能性の実現に向けて、杜甫が当時の社会情勢や息子たちの特性を見極めて、その時点での選択肢を考慮しつつ、死に至るまで行動を続けたことを述べた。この杜甫の行動の根底が「詩家自覚」であり、それが最終的に自身の「詩集」を後世に残し、伝えることを実現させたと考えた。

キーワード：詩家自覚　采詩の官　宗文　宗武　夔州

一．問題の所在

軒轅休製律，虞舜罷彈琴。尚錯雄鳴管，猶傷半死心。
聖賢名古邈，羈旅病年侵。舟泊常依震，湖平早見參。
（中略）
畏人千里井，問俗九州箴。戰血流依舊，軍聲動至今。
葛洪尸定解，許靖力難任。家事丹砂訣，無成涕作霖
「風疾舟中伏枕書懷三十六韻奉呈湖南親友」

これは唐の詩人杜甫（七一二～七七〇）の絶筆とされる詩（初めの八句と後八句）である。最後の二句「家事丹砂訣，無成涕作霖」（家事と丹砂の訣、成ること無くして涕は霖を作す）は、「私は家族のためになすべきことも仙薬をつくる秘訣（隠遁すること）も何ひとつ成就することはなかった、涙は長雨のようにいつまでも流れ続けるのだ」とうたい、潭州から岳州間の洞庭湖上に客死したという。今日「詩聖」と称えられる杜甫にしては、何とも相応しくない死であった。大暦五年、五十九歳であった（注1）。このことは一般にはあまり知られていないと思われる。杜甫の亡骸は岳陽に仮埋葬されるが、四十年後、孫の杜嗣業によって亡骸が故郷洛陽郊外の首陽山に移される途次、江陵にて元稹（注2）に墓碑銘を依頼した。このことは、後に杜甫が賞揚される大きな一因にもなる。

さて、その墓碑銘「唐故工部員外郎杜君墓係銘」（全唐文巻六五四）には、その経緯が記されている。長文に亘るため、抜粋して示す。

予嚐欲條析其文，體別相附，與來者為之準。特病懶未就，
（中略）
嗣子曰宗武，病不克葬，歿命其子嗣業。嗣業以家貧無以給喪，收拾乞丐，焦勞晝夜，去子美歿後餘四十年，然後卒先人之誌，亦足為難矣。

元稹は、早くから杜甫の詩を読み、これを分類し編集し後世に残したいと考えていたが、病や懶のために果たせないでいた。嗣業は杜甫の次男宗武の子であった。病に倒れた父に代わり貧しい中懸命に働きこのことを成就させたという。杜甫に続き、子孫も大変苦労したのであった。長男の宗文のことは、ここには記載がない。

当たり前のことだが、元稹がこの墓碑銘の中で、杜甫を称賛できるのは、その詩を読むことができたからである。ということは、杜甫の詩が後世に伝わり残っていたということ、しかも、愛読者も多くいたということが考えられる。

もう一つ、詩集自体は今は伝わらないが、樊晃（注3）の編纂した杜甫の詩集『杜工部小集』の序に、次の一節がある。

（前略）文集六十卷、行於江漢之南（中略）江左詞人所傳誦者、皆公之戲題劇論耳、曾不知君有大雅之作、當今一人而已。今採其遺文凡二百九十篇、各以事一作志類。分爲六卷、且行於江左。君有子宗文、宗武。近知所在、漂寓江陵、冀求其正集、續當論次云。

と、杜甫の文集は六十卷あり、江漢の南に普及していたこと。また、江左の詞人たちは杜甫の戯題劇論を伝承し、大雅の作品があることを知らないこと。そして、この小集がおよそ二九〇篇（六卷）であることが記されている。最後に杜甫の子である宗文、宗武が江陵にいることがわかったので、その正集を手に入れたいことが述べられている。

杜甫の詩、詩集はその子どもたちに伝えられていたのである。後半生の流浪、貧窮生活の中で、杜甫は自身の詩集を次代に残すことができた。このことは当時の社会状況と杜甫の生活を鑑みれば、殆ど奇跡に近いことである。

では、どのように詩が伝えられ、残されたのであろうか。これまで詩家の自覚として杜家の伝統として、詩を残していくということが、杜甫の詩の中で仰々しく述べられていたために見失いがちであった「子や家族に伝え、残す」という視点から私見を述べてみたい。

二．詩家と生活

「詩家」という言葉は、杜甫の詩中に五例ある。下線は稿者（以下同じ）。

一、示我百篇文，詩家一標準。「贈鄭十八賁（雲安令）」
二、載聞大易義，諷興詩家流。「毒熱寄簡崔評事十六弟」
三、吾人詩家秀，博采世上名。「同元使君舂陵行」
四、詩家筆勢君不嫌，詞翰升堂為君掃。「醉歌行」
五、史閣行人在，詩家秀句傳「哭李尚書」

これらの用例をみれば、「詩家」として詩を伝え残すということは、世の中に伝わる名作の詩を採集し、広く社会に伝え、世俗の風紀をただすというような儒家的矜持が感じられるであろう。それは杜甫の姿の一面を伝えるものとして妥当な見方であるといえる。しかし、もう少し、詩を伝えるということ、何のために詩を残すのかということを、杜甫がおかれた当時の状況をもとに考えてみたい。

杜甫が成都を旅立った七六五（永泰元）年からその死に至る七七〇（大暦五）年までの状況を古川末喜が作成した年表（注4）から抜粋し、再構成して示す。

◆五四歳　七六五（永泰元）年

正月高適死す。杜甫は嚴武の死の前に草堂を去る（長安で検校尚書工部員外郎に就任するため）。四月三十日最大の支援者で友人の嚴武死す。五月郭英乂が嚴武の後任となり、嚴武のお気に入りの崔旰を殺そうと謀る。杜甫は嘉州に下り、戎州から長江に入り、瀘州を経て渝州、忠州、雲安で病に伏せ翌年三月まで滞在する。思いがけない長患いの為、長安に赴き工部員外郎に就く可能性が少なくなる。閏十月、崔旰が成都尹・剣南節度使の郭英乂を殺す。柏茂林、楊子淋等が挙兵して崔旰を討ち、蜀中が大いに乱れる。

◆五五歳　七六六（永泰二・十一月大暦と改元）年

春雲安にあり。晩春三月夔州に下る。白帝山の西閣に住む。夔州刺史王崟は旧知の間柄、後任の刺史は崔卿で、杜甫の母方の親戚。自宅で鶏を飼い、秋にはチシャを作る。晩秋から晩冬、柏茂淋が夔州刺史、防禦使として着任。柏茂林は杜甫に月俸を与えるなど援助を惜しまず、杜甫も柏茂林の宴席に連なって詩の花を添え、上奏文の代作もする。この時期、杜甫は上京して工部員外郎に就く可能性がなくなったこと（着任期限切れ）を知りつつも、まだ夢を棄てきれないでいる。

◆五六歳　七六七（大暦二）年

夔州にあり。晩春、弟の杜観が夔州に来る。夏、杜観は藍田で新妻を娶り、冬には江陵に住む。瀼西の居宅は、初め賃借りし、後に四十畝果樹園とともに購入。現地少数民族の柏夷（伯夷）、辛秀、信行、阿段、阿稽らが使用人として杜甫の農的生活を支える。家まわりの畑で野菜作りをし、蜜柑作りの経営農業を始める。同時に東屯の地に自分の稲田を持ち、米作りの経営管理を始める（一説に、柏茂林が杜甫に瀼西宅、果樹園四十畝を提供し、東屯の百頃の公田を管理させたという）。夏、虎を防ぐための柵を修理する。秋、おそらくは側室を娶る（一説では、妻の楊氏が亡くなったので現地の婦人と再婚し、「山妻」と称した）。秋、稲田の収穫のために瀼西より東屯に居を移す。瀼西の居宅は姻戚（おそらく娘婿）の呉郎に貸し与える（「又呈呉郎」）。蜜柑を収穫する。

◆五七歳　七六八（大暦三）年

南卿兄に瀼西の果樹園四十畝を贈与する。正月中旬、家族を引き連れ夔州を去る。巫山県、峡州、宜都、松滋を経て、二月江陵に至る。旧知の鄭審、李之芳と交流する。江陵の実力者衛伯玉からの厚遇は得られず。家族をしばらく当陽の弟杜観の居所にあずけ、金策のため武陵に行く。秋、家族を伴って江陵を去り、南の公安に至る。年末に公安を去り岳州に到って越年。李之芳はこの秋、江陵で死ぬ。

◆五八歳　七六九（大暦四）年

正月岳州を去り、潭州に向かう。洞庭湖に入り、青草湖に泊し、湘水を遡り、白沙駅に宿る。喬口、銅官渚を過ぎ、新康、双楓浦を経て清明節（この年は二月二十二日）頃、潭州に至る。左耳聞こえず、右手が麻痺し左手で字を書く。岳麓山を訪ねる。韋之晋を頼るために潭州から南下して衡州へ向かう。韋之晋は潭州刺史に転任しまもなく四月に死ぬ。衡州でその訃報を聞く。秋、潭州に引き返し越年。潭州では下船して江閣で過ごす。また船上にも城内にも住む。韋之晋の後任として崔瀧が潭州刺史・湖南都団練観察処置使となり善政を行う。杜甫は崔瀧を高く評価。

◆五九歳　七七〇（大暦五）年

春潭州にあり。夏四月、湖南兵馬使の臧玠が潭州で乱を起こし、潭州刺史の崔瀧が殺される。反乱を避けて衡州に赴く。衡州から耒水を遡って郴州に向かい、郴州刺史代行の崔偉を頼ろうとする。耒陽で洪水に遭い五日間船が進まず食料を欠くも、耒陽県令の聶氏より酒肉を送られ難を脱す。六月臧玠の乱がおさまり郴州には向かわず、衡州から潭州に帰る。秋、潭州にあり。漢陽から襄陽に行き、さらに長安に向けて秋に潭州を発つ。冬、潭州と岳州の間で客死する。

以上、相次ぐ反乱や内戦、裏切り、援助者の死、友人の死など、詩を残し、詩を伝えていくには、極めて困難な状況であると察せられるであろう。

三、詩を残すこと、伝えること

詩を残す方法ににについて、杜甫はどのように考えたのだろうか。前述の樊晃編『杜工部小集』序には、「文集六十巻、行於江漢之南」とあった。六十巻にも及ぶ詩集は今日現存する全詩数一四一八首と一致するものなのだろうか。現存の詩の中で、杜甫が成都を去り夔州から湖南に至る六年間に制作したものは、六二一首と、全詩中の四四％にあたる。これだけの詩を上述の状況の中で制作したのは杜甫の執念の結果とでもいえよう。さて、これらの詩は、当然杜甫が船で各地を移動する際に携えていたと考えられるが、詩を残す、伝えるという観点から考えた場合、筆写した複本の存在が考えられるであろう。現存する詩の中では、自身の詩を書き写して編集するということは述べられていないが、「采詩の官」を自負する杜甫においては、おそらくいくつかの複本を作成していたと考えられる。それらの複本が存在したと措定し、どのように保存し後世に伝えていくか。最晩年の杜甫の状況を踏まえて、いつくかの可能性を挙げてみたい。

一つ目は、宮廷の書庫に保管すること。杜甫は、かつて集賢院待制であったとき具に宮廷書庫の様子を目の当たりにしていただろう。そこでは、数々の書籍が集められて、筆写さ

れたり、或いは校訂が行われたりしていた（注5）。役所での仕事は多忙を極め、その整理や管理もなかなか進まず、仮に杜甫の詩集が保存されるとしても、その詩の本質を理解されずに訂正されてしまう可能性があることを自身の経験から感じていたのではなかろうか。加えて度重なる戦乱において、書庫も被災し荒廃していることを知っており、宮廷での保存が安全であるという認識はなかったものと思われる。たとえ尚書省の工部員外郎として長安へ帰参できたとしても、宮廷書庫に保存することは絶対なものではないと考えていただろう。

二つ目は、寺院等へ保管すること。杜甫は若い頃から、特に仏教への関心が高く、たびたび寺院を訪れている。寺院には仏典の他、様々な書籍が整理保存されていて、僧たちの学びの拠点にもなっていた。杜甫も科挙受験前に、江蘇、浙江の地を旅し寺院に宿泊していた（注6）。おそらくそこで受験勉強をしていたかもしれない。寺院も戦乱の影響を受けるかもしれないが、寺院に自分の詩集を保管してもらうことを杜甫が考えることは、極めて可能性の高いことだと思われる。それ故に、最晩年の窮乏した状況となっても各地の寺院等を訪ねる行動をしているのではなかろうか。自身は帰依できなかったが、もちろん仏教への憧憬の思いは持ち続けていたに違いない。

三つ目は、友人に託すこと。杜甫が自作の詩を友人に送ること、手紙代わりに、或いは手紙に添えて詩を送ることは何度も試みられている。この場合の友人とは、杜甫と利害関係があるものもいれば、そうでないものもいるだろう。また、杜甫の詩の価値を理解できるものもあれば、単なる詩としてしか捉えられないものもいるであろう。特に杜甫最晩年の詩は、詩律の規則を離れた難解なものと日常生活の細々なことを歌った詩に大別されるであろう。その詩を受け取ったもの、託されたものが、その詩の本質を理解できないことも大いにあると考えられる。理解されなければ珍重されず破棄され、理解されたものだけが伝わって残る。このようなことが起こるであろうことも杜甫は承知済みであったのではなかろうか。いつ戦乱が勃発し、いつ命がなくなるかもしれない。そういう半ば開き直った思いをもちつつ、詩を書き送ったのだとも考えられよう。

四つ目は、援助者に託すこと。成都時代の杜甫の最大の援助者は嚴武（七二六～七六五『新唐書』巻一二九）である。嚴武なら杜甫の詩の価値を知り、しかるべきルートでその詩集を保管できたかもしれない。嚴武亡きあと、杜甫は援助者を求めて各地を移動するが、そこでの実力者たちは、杜甫の詩の本質を理解できるものではなかった。彼らが杜甫を援助するのは、かつて左拾遺として皇帝のそばに仕え、今、工部員外郎を帯びる郎官である杜甫が自らを讃える詩を作ってくれるからである。これらの詩は、儀礼的なお追従の詩であっ

ても、その中に杜甫の学識が見え隠れするものでもある。もしも後世に残され、見識のある人が見れば、そこに杜甫の真価を見つけうる可能性が残されているかもしれない。実際これらの詩は残されていて、そこに杜甫の苦境と強烈な自負心を後世のものは読み取ることができる。

五つ目は、詩人仲間に託すこと。詩人仲間と友人との区別は難しいが、ここでは、後世詩人として名前が残っているものたちを詩人仲間と考えたい。同時代の文学集団を考える際に、それぞれの文学に対する主張の違いが挙げられる。杜甫の生きた時代、その文学的主張の違いから三つの文学集団があり、それぞれの主張に沿った詩集を編纂していたとされる（注7）。歌舞管弦にかかるものをよしとする藻飾派の『國秀集』（芮廷章編）、虚飾を排した古詩を尚ぶ尚古派の『篋中集』（元結編）、その折衷である折衷派の『河岳英靈集』（殷潘編）である。杜甫は人間関係からいうと尚古派と多く人脈を持っていた。特に最も讃えられる孟雲卿とは旧知の親友であった。彼とは人生の節目節目で再会し、文学論を語り合っている（注8）。尚古派が詩集を編むときには、人脈からいえば杜甫の詩が採られてしかるべきであった。しかし、人脈はあっても詩作における杜甫の文学的主張は尚古派とは異なるものであった。杜甫の生前には、いわゆる同時代の文学集団が編集するアンソロジー詩集（「唐人選唐詩」）に、杜甫の詩は一首も採録されることはなかった。杜甫の死後、一三七年たった九〇七年に韋莊によって編纂された『又玄集』に初めて杜甫の詩が七首、しかも圧巻として採録された。しかし、採られた詩の殆どは成都時代のもので、すべて平仄の理になかったものであった（注9）。杜甫が晩年に試みた詩律の規則を破る作品は採られていない。杜甫が最晩年に行った文学的挑戦は、なかなか同時代の詩人たちには理解されなかった状況が浮かび上がってくる。おそらく、杜甫もそのことを自覚しており、だからこそ、独自の詩論を展開し、己の文学観（注10）を確立しようとしていたのだと考えられる。そのためにも、なんとしても、自分の詩は残さなければならなかったのである。それが、実の意味での「詩家の自覚」であったのではなかろうか。その最後の方法が、六つ目の「家族に託すこと」である。

六つ目は、家族に託すこと。これを実現させる大前提は、家族がずっと生きていける、家系が続くということである。生きていくには生活の糧が必要である。任官していた時を除き、杜甫は生活の糧の多くを援助者に頼っていた。自分の死後、このような生活を続けることはできないことを杜甫は承知していたに違いない。何とかして家族のために生活の基盤を準備しなければならないと必死に考えていただろう。

最晩年の杜甫の不可解な行動の中にある生活基盤構築への試みを次項では探ってみたい。

四．詩家の実現

前項の六つ目として「家族に託すこと」について述べたが、ここでは次の三つの観点から、このことを考えてみたい。

①子どもに託すこと…自分の息子、宗文、宗武に託すこと
②家族に託すこと…自分の兄弟姉妹あるいは娘婿（呉郎）に託すこと
③家族を増やすこと…妾を持つ、夫人楊氏死去→再婚し、子どもを持つこと

まず、①子どもに託すこと。これが一番確実な可能性を持つ。杜甫には、二人の息子がいた。その息子たちに、「詩家」である杜家の家風を継いで欲しいと考えることは父親として自然なことである。ただ、この子どもたちが育ってきた環境を考えると、杜審言を曾祖父に持つ杜家の家風を引き継ぐことができるだけの学びの機会と時間が確保できただろうか、また、実際に引き継げるだけの技量を持っていたのだろうか。詩に残された息子たちの様子を見ていく。

宗文（長男）は、七五〇年生まれ、幼名は熊児。宗武（次男）は、七五四年？生まれか、幼名は驥子。

成都時代は杜甫の生涯の中で最も落ち着いた時期であったといえよう。「江村」（七六〇年）には、「老妻畫紙為棋局，稚子敲針作釣鉤」と、老いた妻は紙に線を書いて碁盤をこしらえ、子どもたちは針を敲いて釣り針を作っている。まだ子どもたちは幼かった（宗文十歳、宗武六歳か）。だが、男子二人は次第に学問を始める年頃になるが、「屏跡三首」其三（七六一年 宗文十二歳）に「失學從兒懶、長貧任婦愁。百年渾得醉、一月不梳頭」とあり、学問をやめてしまうのは、子どもの怠惰な性格のせいで仕方ないことだ、長い間の貧乏暮らしは妻を悲しむままに任せる他はないと歌う。ここでの子どもは長男の宗文のことだろうか。最後に「人生百年、その間ずっと酔っ払っていたい、私はひと月も頭を梳っていない」と開き直り、長男宗文の教育に対して匙を投げているかのような口ぶりである。同様の表現が「不離西閣二首」其一（七六六年冬 十六歳）にも「失學從愚子，無家任老身。」のようにある。

一方、次男宗武には、「宗武生日」（七六六年正月 宗武十三歳）において、

詩是吾家事，人傳世上情。熟精文選理，休覓綵衣輕

と述べたり、「又示宗武」（七六八年 宗武十五歳）では、

覓句新知律，攤書解滿床。試吟青玉案，莫羨紫羅囊。
假日從時飲，明年共我長。應須飽經術，已似愛文章。
十五男兒志，三千弟子行。曾參與游夏，達者得升堂。

と歌い、大いなる期待が込めてられているように思われる。

さて、夔州においても、杜甫は子どもたちに対して詩を作っている。しかし、その内容はこれまでのものとは趣を異にする。

まず、宗文に対しては「催宗文樹雞柵」（七六六年　宗文十六歳）と、宗文に鶏をいれる柵を作るようにと促す詩である。

吾衰怯行邁，旅次展崩迫。愈風傳烏雞，秋卵方漫喫。
自春生成者，隨母向百翮。驅趁制不禁，喧呼山腰宅。
課奴殺青竹，終日憎赤幘。蹋藉盤案翻，塞蹊使之隔。
牆東有隙地，可以樹高柵。織籠曹其內，令入不得擲。
稀間苦突過，背距還污席。避熱時來歸，問兒所為跡。
我寬螻蟻遭，彼免狐貉厄。應宜各長幼，自此均勍敵。
籠柵念有修，近身見損益。明明領處分，一一當剖析。
不昧風雨晨，亂離減憂慼。其流則凡鳥，其氣心匪石。
倚賴窮歲晏，撥煩及冰釋。未似尸鄉翁，拘留蓋阡陌。

要約すれば、杜甫が長男の宗文に対して鶏を収容する柵を作るように事細かに命じた詩である。傍線部「課奴殺青竹，終日憎赤幘」は、「奴」（使用人）に仕事を課してというように、宗文が使用人と共同で仕事をするように言いつけている。また、宗文にいいつけたことができたかどうか問い、宗文がそれに答えているさまも歌われている。ここには学を失った宗文に対して、奴とともに、生きていく術を細かく伝授していこうという親心が窺われる。少々口うるさく、説教じみてはいるが、親亡き後も子どもが生きていけるようにと願う杜甫の願いが込められていると言えよう。

また、「課伐木」（七六七年　宗武十四歳・宗文十七歳）という長い序文の付いた詩を次男の宗武（宗文に作るテキストもある）に示している。

課隸人柏夷，辛秀，信行等入谷斬陰木，人日四根止，
維條伊枚，正直挺然。晨征暮返，委積庭內。我有藩籬，
是缺是補，載伐篠簜，伊仗支持，則旅次小安。山有虎知
禁，若恃爪牙之利，必昏黑搏突。夔人屋壁，列樹白蒭鏝
為牆，實以竹，示式遏。為與虎近，混淪乎無良，賓客憂
害馬之徒，苟活為幸，可默息已。作詩示宗武（一作文）誦。

長夏無所為，客居課童僕。清晨飯其腹，持斧入白谷。
青冥曾巔後，十里斬陰木。人肩四根已，亭午下山麓。
尚聞丁丁聲，功課日各足。蒼皮成委積，素節相照燭。
藉汝跨小籬，當仗苦虛竹。空荒咆熊羆，乳獸待人肉。
不示知禁情，豈惟干戈哭。城中賢府主，處貴如白屋。
蕭蕭理體淨，蜂蠆不敢毒。虎穴連里閭，隄防舊風俗。

泊舟滄江岸，久客慎所觸。舍西崖嶠壯，雷雨蔚含蓄。
牆宇資屢修，衰年怯幽獨。爾曹輕執熱，為我忍煩促。
秋光近青岑，季月當泛菊。報之以微寒，共給酒一斛。

ここには、序文の冒頭に隷人（下僕・しもべ）三人「柏夷」「辛秀」「信行」の具体的な名前が列挙されている。彼らは夔州で杜甫が雇った現地の使用人であり、彼らの他にも女性の阿稽や阿段と呼ばれる少年など幾人かの使用人が詩の中に登場する。彼らに対する杜甫の眼差しは優しく敬意に満ちていて、その技能の高さと謙虚で誠実な生き方に心を動かされている様子がよくわかる。

この詩では、彼らに命じて、木や竹を伐り出して虎の侵入を防ぐ柵を作らせたり、垣根などを修理させたりしてもらうが、その卓越した技能と誠実な働きぶりに感謝し、たくさんの酒を労いに出そうという内容である。そして、このことを息子に示して誦ぜしめたのであった。ここにも、夔州という土地で，技能を身に付け、それを使いこなしながら誠実に生活を切り拓いていく現地の人々に対する敬意を持って接することや、その姿に学んで息子たちにこの地で生きていくようにという杜甫の思いが読み取られよう。もはや自分が長安に帰る可能性は皆無に近いことを自覚していたのだろう。子どもたちの来し方行く末に思いを馳せる杜甫であったのだろう。

また、宗文、宗武の二人に対しての詩もある。

「熟食日示宗文宗武」（七六七年　宗武十四歳・宗文十七歳）

消渇游江漢，羈棲尚甲兵。幾年逢熟食，萬里逼清明。
松柏邙山路，風花白帝城。汝曹催我老，回首淚縱横。

寒食の日（熟食：冬至から一〇五日目を挟む三日間、火を使わずに冷たいものを食べる風習）に、今年も故郷に帰って先祖の墓参ができないことを嘆き悲しむ詩を兄弟に示している。「汝曹催我老」と、おまえたちが成長するにつれて自分がどんどん年老いてくることを実感している杜甫は、いよいよ自分亡き後の子どもたちのことが大いに気掛かりであろう。

「又示兩兒」（七六七年　宗武十四歳・宗文十七歳）

令節成吾老，他時見汝心。浮生看物變，為恨與年深。
長葛書難得，江州涕不禁。團圓思弟妹，行坐白頭吟。

この詩においても、「令節成吾老，他時見汝心」と、ますます私は老いていくが、いつかおまえたちもこの時の私の気持ちがわかるときが来るだろうと、我が亡き後の子らの思いを推し量っている。それにしても弟妹たちからは一向に便りがないと、孤立を深める杜甫一家の姿が浮き彫りになってく

る詩である。

この後、杜甫は夔州を離れ、船で湖南を漂泊することになるのだが、この夔州を子どもたちの生活の場のひとつと定めていたのかもしれない。夔州刺史の柏茂林の援助を受け、農園と果樹園を持ち、米と野菜作りをしていた杜甫が、学を失った子どもたちの生きる場として、現地の人と馴染み、溶け合ってこの地で生きることを子どもたちに求めていたのかもしれない。「秋野」五首其五に、「兒童解蠻語、不必作参軍」（我が子はここで暮らすうちに、蛮族の言葉がわかるようになった。蠻語を使えるようになり蛮族を管理をした蛮府参軍になる必要などない）とある。

こののち、杜甫の死後の二人の足跡はよくわからない。冒頭で言及したように、次男宗武は江陵で貧しく暮らし、嗣業を設けて、最終的に元稹に墓碑銘を依頼することになる。しかし、長男の宗文の行方は知れない。ひょっとすると、農に生きる術を教えてもらいつつ使用人たちと夔州に残り、農業を糧として暮らしたかもしれない。詩を残す、詩を伝えることは、杜家の家長として、父として、子どもたちに生活の術を伝え、生きる基盤を築くことであったのかもしれない。

二つ目は、②家族に託すことである。杜甫には弟妹が複数いたので、自分の詩集を託すことがあった可能性は考えられる。その詩の内容や価値が理解されるかどうかはともかく、事実上の家長であった杜甫の詩が弟妹たちの手元にあったことは十分に考えられる。何かの機会にそれが世に出ることになったのかもしれない。もう一つの可能性、それは、おそらく杜甫の娘婿だろうと推定される呉郎という人物に詩を託すことが考えられる。呉郎が歌われた詩は三つある。

「簡呉郎司法」

有客乗舸自忠州，遣騎安置瀼西頭。古堂本買藉疏豁，借汝遷居停宴遊。
雲石熒熒高葉曙，風江颯颯亂帆秋。卻為姻婭過逢地，許坐曾軒數散愁。

「簡」とは手紙を送ることで、ここでは手紙代わりの詩という意味であろう。「司法」は司法参軍のことで、州の長史・司馬の下に位置する属官、府や市で刑罰を司る官職をさす。呉は杜甫の姻戚なので「郎」と親しみを込めて呼んでいる。忠州からやって来た呉郎に自分の住んでいた瀼西の家を貸し与えた。呉は司法参軍という、それなりの地位のある役人なので、少しは詩についての教養もあると推察される。また、姻戚として娘婿に、父として詩集を託したのかもしれない。

「又呈呉郎」

堂前撲棗任西鄰，無食無兒一婦人。不為困窮寧有此，祇緣恐懼轉須親。

即防遠客雖多事，便插疏籬卻甚真。已訴徵求貧到骨，正思戎馬淚盈巾。

この詩では、家を貸すにあたって、隣の寡婦に恐怖を与えないよう配慮して欲しいと事細かな指示を伝えている。戦乱で夫を亡くし徴税による貧困に喘いでいる婦人の立場に思いを寄せて欲しいと現役の役人でもある呉郎に注文をつけている。この詩を受け取った呉郎がどんな思いをもったのかは分からないが、呉郎は杜甫が遠慮なく思い切って言える相手であったのだろう。もう一つの詩は、その呉郎が重陽の節句の前日に杜甫を訪ねてきてくれた時のものである。

「晩晴呉郎見過北舍」

圃畦新雨潤，愧子廢鉏來。竹杖交頭挂，柴扉掃徑開。
欲棲群鳥亂，未去小童催。明日重陽酒，相迎自醱醅。

呉郎が農作業の手をやめて訪ねてくれて、遅くまで話し込んでくれたことに感謝し、明日は一緒に重陽の菊酒を飲もうと明日の来訪を迎えている詩である。呉郎の杜甫に対する気遣いとそれを素直に感謝する杜甫の気持ちが率直に表現されている。呉郎は礼節を守りながらも杜甫と十分に話しができる人物だったように読み取れる。それだからこそ、呉郎に詩集を託した可能性は十分に考えられる。

最後に考えられるのは、③家族を増やすことである。杜甫が呉郎に瀼西の家を貸し与えた頃、一説によると杜甫は妾を娶ったとも再婚したともいわれている。この頃長年連れ添った妻の楊氏が四九歳で亡くなったとも伝えられている。現存する杜甫の詩に妻の死を歌ったものがないので、この可能性は低いと考えられるが、妾を娶ったということには、それなりの根拠があった。それは、七七〇年に臧玠の乱を避けて衡州に入った時の詩「入衡州」の中に「遠歸兒侍側，猶乳女在旁」と、遠くから帰れば息子は側に付き添い、乳飲み子の娘も傍らにいたという一節があり、また、絶筆とされる「風疾舟中伏枕書懐三十六韻奉呈湖南親友」に「瘞夭追潘岳」と、昔潘岳が幼児を亡くして旅先の路傍に埋葬したのと同じことをしたという一節があることからである。もしも、杜甫が楊婦人を亡くしていたとしたら、子どもや一家のためにも再婚はしたかもしれない。それはどんな女性だったのか。一説には、当時住んでいた夔州の婦人だったので、「山妻」と呼んだのかもしれない（「孟倉曹步趾領新酒醬二物滿器見遺老夫」）。では、楊夫人が生存していた場合に妾を娶るのはなぜなのか。それは、杜家を継承していくために、新たに家族を増やしていくことであったのではないだろうか。また、もし妾が夔州の現地の人ならば、家族が今後生きていくことのできる生活の基盤を築くことも可能だろうし、長男宗文も生活の糧を得られるかもしれない。相次ぐ反乱の勃発や病に苦し

む最晩年の杜甫の状況を考えたとき、今日では、この選択は無理だと考えられよう。しかし、一千三百前の死生観、しかも、仙術を志したことのある杜甫にとっては、そんなに突拍子もないことではなかったのかもしれない。新しい命に自身の命を託す。詩を残すこと、詩を伝えることには、杜甫が命を懸けた執拗なまでの執念が込められていたのだ。

おわりに

以上、杜甫の詩が後世に残された可能性を、杜甫自身の生活と行動の産物という視点から考えてみた。その根底には、杜家の家業を継承し、途絶えさせてはならないという強烈な思い「詩家自覚」と、その具体的な手段として、杜家を維持していくこと、つまり、今後の家族の生活を持続させていかなければならないという家長としての大きな責任があった。それ故、当時の社会情勢や息子たちの特性を見極めて学問とは異なる生きる術の可能性を探り、その時点での実現可能な選択肢を考え、その実現にむけて死に至るまで行動をし続けたのであった。

絶筆において「家事丹砂訣，無成涕作霖」と述べた杜甫だが、杜甫の詩家自覚は、このような現状と将来を見据えつつ、強かにかつしなやかなものであったのではないだろうか。家事を含め持続可能なあらゆる方向の可能性に対して誠実に努力し続け、最終的に後世に自身の「詩集」を伝えることを実現させた杜甫こそ「詩聖」という名に相応しいと考える。提出した各論については詳細な論証が必要だが、また稿を改めたい。

注

＊杜甫の詩は、下定雅弘・松原朗編『杜甫全訳詩注㈠～㈣』講談社学術文庫二〇一六所収のものをもとにした。この本は、清・仇兆鰲『杜詩詳註』を底本にしている。

（注1）杜甫がいつどこで亡くなったかについては定説がない。耒陽県で洪水に見舞われた際に県令聶某から贈られた酒肉を大飲大食して亡くなったことが『新唐書』巻二〇一等に書かれている。

（注2）元稹（七七九～八三一）は、唐の詩人、官僚。字は微之。白居易（七七二～八四六）と深い交友を結び、唱和詩や新樂府のほか、伝奇小説『鶯鶯傳』を書いた。

（注3）樊晃（生没年不明）は、唐の詩人、官僚。潤州刺史の在任期間は七七〇年～七七一年とされる。

（注4）古川末喜作成の年表は、下定雅弘・松原朗編『杜甫全訳詩注㈣』講談社学術文庫二〇一六所収のものをもとにした。

（注5）中　純子「詩の編纂」『詩人と音楽』知泉書館二〇〇八

（注6）黒川洋一「杜甫と佛教」『杜甫の研究』創文社一九七七。

（注7）中澤希男「唐人選唐詩考」群馬大学教育学部紀要（人文科学編一一）一九七三

（注8）杜甫が孟雲卿を歌った詩は次の四首が残っている。孟雲卿が杜甫を歌った詩は残されていない。

「酬孟雲卿」　七五八（乾元元）年

「冬末以事之東都湖城東遇孟雲卿復歸劉顥宅宿宴飲散因為醉歌」　七五八（乾元元）年

「解悶十二首」其五　七六七（大暦二）年

「別崔潩因寄薛據孟雲卿」　七六七（大暦二）年

（注9）冨山敦史「韋莊編『又玄集』中の杜詩七首について」国文―教育と研究三九　奈良教育大学国文学会二〇一六

（注10）杜甫「戯為六絶句」は、杜甫独自の文学観を六つの絶句で表明している。

「戯為六絶句」

庾信文章老更成，凌雲健筆意縱横。今人嗤點流傳賦，不覺前賢畏後生。

楊王盧駱當時體，輕薄為文哂未休。爾曹身與名俱滅，不廢江河萬古流。

縱使盧王操翰墨，劣于漢魏近風騷。龍文虎脊皆君馭，歴塊過都見爾曹。

才力應難誇數公，凡今誰是出群雄。或看翡翠蘭苕上，未掣鯨魚碧海中。

不薄今人愛古人，清詞麗句必為鄰。竊攀屈宋宜方駕，恐與齊梁作後塵。

未及前賢更勿疑，遞相祖述復先誰。別裁偽體親風雅，轉益多師是汝師。

特に其六には、自分の才能が前代の詩人たちに及ばなかったとしても、自分の才能に疑いをもってはいけない。前代の詩人の優れた作品をお手本として、『詩経』の精神に背く詩を退けていけば、模範とすべき詩人、作品が多くなり、自分にとっての師となるのだと、時流の党派に依らない杜甫独自の詩論の一端を垣間見ることができる。

参考文献

黒川洋一『杜甫の研究』創文社　一九七七
安東俊六『杜甫研究』風間書房　一九九六
中　純子『詩人と音楽』知泉書館　二〇〇八
古川末喜『杜甫農業詩研究』知泉書館　二〇〇八
古川末喜『杜甫の詩と生活』知泉書館　二〇一四
下定雅弘・松原朗編『杜甫訳詩注㈠～㈣』講談社学術文庫　二〇一六